扉を開く INTERVIEW

作家

池井戸潤

IKEIDO Jun

『半沢直樹』シリーズや『下町ロケット』など、エンターテインメント小説の第一人者である作家の池井戸潤さん。息をもつかせない展開や痛快な決めゼリフで読者を魅了してやまない作品は、どのように生まれるのか。大学卒業後七年勤めた都市銀行での経験と、これまでの読書体験が作家としての「武器」になっているという。人気小説の創作にかける秘めた思いを語っていただいた。

取材・文 小堂敏郎
写真 野瀬勝一

エンターテインメント小説は登場人物の数だけ人生がある

読者に楽しんでもらうためにとことん人間ドラマを描く

――池井戸さんは一九八八年に大学を卒業後、都市銀行に就職されました。そのころの銀行業界は人気の就職先でしたね。

池井戸　当時、都市銀行は一三行ありましたけど、人気業種でしたから競争率は高かったと思います。銀行を志望したのは、為替や融資、国際業務などいろんなことをやっているうえに、何となく華やかで、魅力的に映ったからです。

――最初に作家になりたいと思ったのは、本好きの少年時代だったと伺いました。銀行に勤めながらも小説を書きたいという思いはお持ちだったんですか。

池井戸　その気持ちはずっと持っていました。ですから、あまり銀行員らしくなかったかもしれませんね（笑）。みんなうちへ帰ると仕事や資格取得関係の勉強をしているのに、私は小説を書いていましたから。

――その都市銀行を退職された九五年ごろから銀行業界は苦しい時期に差し掛かっていました。

池井戸　そのころ、私自身、銀行という組織と合わないと感じるようになっていました。株価もどんどん下がっていく、そんな時期でしたから、結果的には辞めてよかったのかもしれません。

――九八年に江戸川乱歩賞を受賞して作家としてデビューされ、近年では企業を舞台にした作品を数多く発表されています。

池井戸　企業を舞台にした小説は、書けそうで意外に書けないんです。読み手の多くが企業で働いているのに、書き手の作家にはサラリーマン経験のある人が驚くほど少ない。その点、私は銀行で融資の担当をしていた経験もあり、中小企業から上場している大企業まで、一〇〇〇社以上は見ているわけです。それだけの数の企業の雰囲気や銀行とのやり取りを知っているのは、企業を舞台にした小説を書くうえで、大きな武器になっていると思います。

――『半沢直樹』シリーズなどを読むと、銀行を含め、会社組織というのはひどい所だと思う方もいらっしゃるでしょうね。

池井戸　作家としてはそれがなかなか難しいところでして……。私の小説は基本的にはサスペンスの手法で書いていきます。何か謎があり、それを解決していくということを繰り返しながら物語を進め、最後には巨悪が倒される。そういうミステリー的な展開を読者に味わってもらうために、「盛っている」ところもある。いわば脚色するわけですね。

　例えば銀行が舞台の小説で、銀行員の方であればその盛っている部分を読めば、「脚色してあるな」というのがわかるはずです。しかし、銀行のことをよく知らない読者は「こんなひどい組織なのか」と思い込み、義憤にかられる。実際、私が「盛った」部分を、「銀行はとんでもない」と真に受けた声が届くこともあるんです。

いけいど・じゅん● 1963年岐阜県生まれ。慶應義塾大学卒業。98年に『果つる底なき』（講談社文庫）で江戸川乱歩賞を受賞し作家デビュー。2010年『鉄の骨』（講談社文庫）で吉川英治文学新人賞、11年『下町ロケット』（小学館文庫）で直木賞を受賞。『ルーズヴェルト・ゲーム』（講談社文庫）、『民王』（角川文庫）、『陸王』（集英社文庫）など数多くの作品がドラマ化され、『空飛ぶタイヤ』（講談社文庫）と『七つの会議』（集英社文庫）は映画化された。近刊に『半沢直樹３　ロスジェネの逆襲』『半沢直樹４　銀翼のイカロス』（講談社文庫）。同二作品はドラマ「半沢直樹」の続編として、20年４月からTBS日曜劇場で放映される。

それをエンターテインメントとして読んでもらえるように、私なりに工夫しています。例えば、雑誌連載から単行本にした『半沢直樹』シリーズで、銀行の経営状態を検査する金融庁の検査官が登場します。この検査官は、雑誌のときには典型的な切れ者のエリートキャラクターだったのですが、読者が現実の検査官もそういう人物に思うかもしれない。そこのギャップを埋めるために、単行本にする際には、この検査官を全く別の、エリートらしくない個性的なキャラクターに変えたんです。これはエンターテインメントだから、真に受けたりしないでください、という意味を込めて。

ところがその作品が世に出るや、「ああいう検査官は信頼が置けず、けしからん」と金融庁にクレームが来たとか。どんなに脚色しても真に受けてしまう人はいるんだと思い知りました。

――二〇一九年はラグビーワールドカップが日本で開催され、盛り上がりました。池井戸さんの作品でも、自動車会社のラグビーチームが廃部の危機から立ち上がる作品を書いておられます。社会派ともいえる作品に、エンターテインメント的な要素を加えていくのは難しいのではないですか。

池井戸　そもそも私自身は社会派的なものをテーマにして作品を書くことはありません。どこまでいってもエンターテインメント小説の作家だと思っているんです。こういうことをやったら面白いんじゃないかということをまず考えて、それから物語を紡いでいきます。

ラグビーを題材にした小説『ノーサイド・ゲーム』の場合、日本ラグビーフットボール協会副会長の清宮克幸さんと初めてお会いしたときに、清宮さんが社会人ラグビーチームの話を熱く語っておられたんです。それがすごく面白くて、いつか小説にしようと、自分の中でずっと温めていました。

私自身は、企業がどうするかということより、企業の中の人間ドラマを描きたい。読者の皆さんは勉強のために小説を読むのではなく、通勤電車の中で暇つぶしに読むわけです。ですから、社会派の小説、ノンフィクション的な切り口の小説というのは、エンターテインメントとして広く読まれるのには限界がある。もっとシンプルに、喜怒哀楽という人間の基本的な感情にまで訴えるように書かないと、読者に受け入れてもらえないのではないかと思っています。

小説の致命傷になる登場人物の「破綻」

――エンターテインメント小説は人間を書くもの、ということでしょうか。

池井戸　まず人ありきです。私の場合、最初に主人公の簡単なプロフィルを設定します。例えば大阪の支店にいる、うるさい支店長が上司にいて大変な目に

あっているが、それにめげずに仕事をする気骨ある課長……などと設定する。ただし、その段階では背格好とか、性格は想定しません。最初はいわば「透明人間」みたいな存在なんです。そこから事件とか、登場人物同士のやりとりなどを通じて、主人公のキャラクターが徐々に肉づけされ、人間の姿になっていく。読者も読み進めるうちに、最初は名前だけだった人物に「この人はこういう人なんだな」と想像を膨らませることになります。

――池井戸さんの小説では、反骨精神があって、組織と戦う人物が多く登場します。

池井戸　エンターテインメント小説には対立構造が必要なんです。だから、支店長や上司などの敵役をつくるんです。それも強い権力を持っているなど敵役がパワフルであればあるほど対立構造が鮮明になり効果的です。一方でそれと戦うのは弱い人間です。最初は弱い人間だけど、何かのきっかけで気持ちが切り替わり、相手に立ち向かっていくといった具合です。

私はいろんなパターンでストーリーを書きます。それができるのは銀行員時代の経験もさることながら、読書体験の影響が大きいと思っています。その体験から得られたストーリーのデータベースみたいなものが頭の中にあるんです。銀行員としての勤務経験は確かに貴重ですが、そうした経験に頼って書いてもすぐにネタ切れになります。それよりはストーリーのパターンをどれだけ頭に蓄積しているか、そこからうまくその小説にあったストーリーを引き出せるかが重要で、その土台のうえにラグビーや銀行の話を乗せて書くわけです。

――池井戸さんの作品には銀行と企業のやり取りなどリアルな場面も出てきますが、事前に綿密な取材をされているのでしょうか。

池井戸　事前の取材はほとんどしません。書こうとするストーリーが根本的に間違っていないかということを確認する程度です。

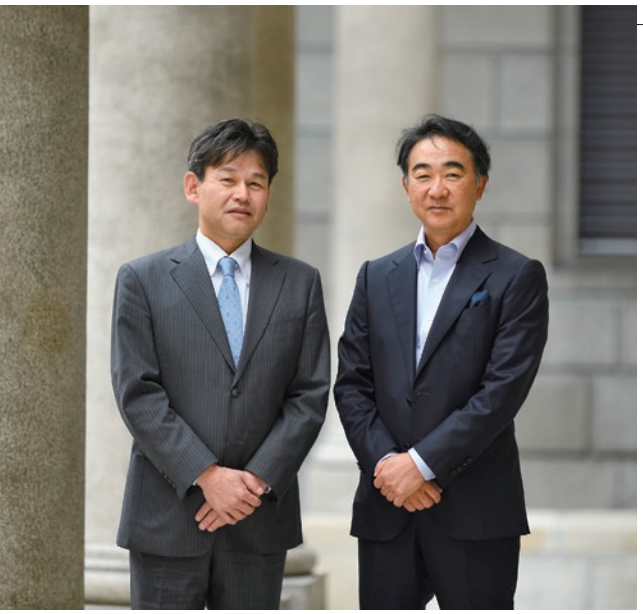
例えば『下町ロケット』という作品を作る際には、大田区の中小企業が力を合わせたら大型ロケットを開発できる、という仮説のうえにストーリーを組み立てました。ただその仮説自体の真偽は、話の真実味に大きく影響しますので、絶対に事前確認しておく必要があります。そこで、執筆前に大田区のロケット関連企業の方に聞いたところ、「その仮説には無理がある」とのこと。ただ、「大田区の小さな会社がエンジンの特許を持ち、大企業にその特許技術を供与するという話であれば現実的か?」と聞くと、「それなら、ありえる」と。なので、取材でお聞きした話をベースにしたストーリーに変えたんです。

私自身、事前取材が綿密なほどいい小説が書ける、とは思っていません。最初にピンポイントで大事なことだけ押さえておき、書き進める間に確認すべき部分が出てくれば後で調べればいい。私はそうしています。

小説にとって、事実に関する間違いは大した傷にはならないのですが、作家都合による登場人物の破綻は致命傷になります。

小説というのは、いろんな登場人物が、それぞれ人間らしく、普通の人と同じように動き、考えていなければいけない。私の作品はどれも登場人物が多いのですが、三〇人登場したらその数だけ人生がある。私は、それを小説の始まりから終わりまでの期間で「輪切り」にして書いている。端役の登場人物も、その人なりの人生を背負って小説に現れるわけです。そして、読者は、そのキャラクターに感情移入して楽しむ。ところが、作家がこう書きたいというストーリーをなぞるために、登場人物の言動が捻じ曲げられると「こんな人いるわけないじゃん」と読者は本を閉じてしまうのです。

小説は人間ドラマですから、そうした登場人物の破綻は、事実の間違いなどとは異なり、最もやってはいけないことだと思っています。それぞれの登場人物に敬意を払いながら書いていくことが本当に大事です。



「知りたい」読者が強める小説の嗜好性

――小説を書く際、池井戸さんなりの流儀のようなものはあるのでしょうか。

池井戸　小説を商品として売らなければいけませんから、おのずと求められる基準があるわけですよね。手あかのついていない「新しい」ものであること、自分にしか書けないものであること、そしてある程度のボリューム感――この三つを自分に課して小説を書いています。

――読者に伝えていきたいメッセージはお持ちでしょうか。

池井戸　私自身、小説にあまりメッセージ性は持たせませんが、あえて言えば、「エンターテインメント小説は面白い」ということが伝わればうれしいですね。一日を終えて疲れた人たちが、夜、テレビを見るのではなく小説を読もうと思ってもらいたいし、小説には奥深い面白さがあるということを知ってもらいたい。私の使命は、そういうものを書くことだと思ってるんです。

　私のことを社会派の作家と誤解していると思われる方から、手紙で「理不尽なことがあった、ぜひそれを糾弾するような小説を書いてほしい」と依頼をいただくことがありますが、私にとって一番大事なのは、世の中をよい方向にもっていくといったことではなくて、エンターテインメント小説の面白さを広く伝えることなんです。

――インターネットやSNSがさらに浸透していくと、小説のあり方も変わるでしょうか。

池井戸　すでに小説は、嗜好品の域にあると思っています。夜、お酒を飲みながらゆっくりするとか、そんな時間の嗜好品に近い。そもそも、小説というのはある程度時間がないと読めないし、単行本だとそれなりに値も張りますからね。

――世の中では小説離れが進んでいるとも言われます。

池井戸　小説を作る側、読む側双方に要因があるような気がしています。

　まず、最近の読者は変わりつつあるように思えます。私たちの世代は、小説とはただ楽しむためだけのものでしたが、この頃は小説から何かを「知りたい」、小説を何かに「役立てたい」という読者が、とくに若い世代に増えているような気がするんです。

　こうしたことは、サイン会で、本に付箋（ふせん）を貼ってくる読者の方が結構いらっしゃることにも表れています。どういう箇所に貼っているのか尋ねると、一番多い答えが「自分の仕事に役立つところ」だと。つまり私の小説を読むのは、楽しみつつも一方で役に立つ情報を得たいからということのようです。こういう「お勉強」の読書が間違っているとは一概に言えませんが、この傾向が顕著になればなるほど、自分の仕事や社会生活とは無関係な本とは次第に疎遠になっていくのではないでしょうか。

　一方、小説を作る側が、こうした読書傾向を意識して書いているとは思えません。もちろん、意識したところで、それに合わせて小説を変えることは難しいという事情もあります。小説とはそういうものですから。結果的に作家が書きたいものと読者が読みたいものがどんどん乖離（かいり）しつつあるのではないでしょうか。

　小説離れの背景には、こうした構造的な問題があるような気がします。

――今後も池井戸さんの作品を楽しみにしています。本日は貴重なお話をありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長　中川忍）